明治の文学

第14巻

森鷗外

坪内祐三［編集］
edited by Yuzou Tsubouchi

筑摩書房

Mori Ougai

坪内祐三[編集]

明治の学

第14巻

森鷗外

江苏工业学院图书馆
藏书章

筑摩書房

明治の文学
第14巻　森鷗外

二〇〇〇年十月十五日　初版第一刷発行

編者　坪内祐三　川本三郎
発行者　菊池明郎
発行所　筑摩書房
東京都台東区蔵前二-五-三　〒一一一-八七五五
振替〇〇一六〇-八-四一二三
印刷　明和印刷株式会社
製本　株式会社積信堂

ISBN4-480-10154-3 C0393 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。
〒三三一-八五〇七　大宮市櫛引町二-六〇四
筑摩書房サービスセンター
電話〇四八-六五一-〇〇五三

自分は小さい時から小説が好きなので、外国語を学んでからも、暇があれば外国の小説を読んでゐる。どれを読んで見てもこの自我が無くなるといふことは最も大いなる最も深い苦痛だと云つてある。ところが自分には単に我が無くなるといふこと丈ならば、苦痛とは思はれない。只刃物で死んだら、其刹那に肉体の痛みを覚えるだらうと思ひ、病や薬で死んだら、それぞれの病症薬性に相応して、窒息するとか痙攣するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである。自我が無くなる為めの苦痛は無い。

目次

舞姫……3
うたかたの記……29
そめちがえ……55
有楽門……66
キタ・セクスアリス……71
独身……175
桟橋……193
普請中……200
花子……210

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

カズイスチカ……220
妄想……236
雁……261
かのやうに……392
田楽豆腐……430
解説―もうひとりの鷗外を追って―川本三郎……444
明治文学年表―坪内祐三……453
森鷗外年譜……457
同時代人の回想―森鷗外先生に就いて―木下杢太郎……462

明治の文学

第14巻

森鷗外

全巻編集　坪内祐三
本巻編集・解説　川本三郎
脚注　花崎真也・坂手輝子
脚注図版　林丈二・林節子
編集担当　松田哲夫（筑摩書房）
ブックデザイン　吉田篤弘・吉田浩美

舞姫

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静にて、熾熱燈の光の晴れがましきも徒なり。今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新ならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりておもへば、稚き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗抔をさへ珍しげにしるしゝを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙

(1) 二等船室。
(2) アーク灯、または白熱電球。
(3) トランプ。
(4) 願いがかなって。
(5) サイゴン。旧ベトナム共和国の首都。一九七六年、ホー・チミン市と改称。
(6) そうでないとしても。
(7) ごくありふれた動物・植物・鉱物など。
(8) 帰国の途についたとき。
(9) 書こう。

のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」[1]の気象を
や養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。
げに[3]東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそ猶心に飽き足らぬ
ところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふも更な
り、われとわが心さへ変り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬
間の感触[4]を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、こ
れには別に故あり。
嗚呼、ブリンヂイシイ[5]の港を出でゝより、早や二十日あまりを経ぬ。世の常なら
ば生面[6]の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航海の習なるに、微恙[7]にこと
よせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭
のみ悩ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掠めて、瑞西の山色をも
見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、
腸[8]日ごとに九廻すともいふべき惨痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、
一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ず
る響の如く、限なき懐旧の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかに
してか此恨を銷せむ。[9]若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すが〳〵
しくもなりなむ。これのみは余りに深く我心に彫りつけられたればさはあらじと思
へど、今宵はあたりに人も無し、房奴[10]の来て電気線の鍵を捩るには猶程もあるべけ

(1) ラテン語。ローマの詩人ホラティウスの言葉（『書簡詩』I、六、一）。何事にも驚かない、の意。外界に左右されない冷淡な態度をいう。
(2) そうではない。
(3) 本当に。
(4) 昨日良しとしたものを今日はだめだとする、すぐ変化してしまうような自分の感触。
(5) ブリンジジ。アドリア海の入口にあるイタリアの港。
(6) 初対面。
(7) 軽い病気。
(8) はらわたが毎日九回もよじれるような、ひどい苦痛。
(9) 消そう。
(10) 船室係。
(11) 家庭教育。
(12) 森鷗外は津和野藩の養老館で学んだ。
(13) 東京大学予備門。旧第一高等学校の前身。
(14) 役所の長官。
(15) 特別によかったので。
(16) 外国官庁の事務制度や組

れば、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き比より厳しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館にありし日も、東京に出でゝ予備黌に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首にしるされたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までにまたなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三とせばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遥々と家を離れてベルリンの都に来ぬ。

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、忽ちこの欧羅巴の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色沢ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪の如きウンテル、デン、リンデンに来て両辺なる石だゝみの人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩聳えたる士官の、まだ維廉一世の街に臨める窓に倚り玉ふ頃なりければ、様々の色に飾り成したる礼装をなしたる、妍き少女の巴里まねびの粧したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろ〳〵の馬車、雲に聳ゆる楼閣の少しとぎれたる処には、晴れたる空に夕立の

(17) それほどには。
(18) 当時、ドイツ帝国の首都。
(19) ばくぜんとした。
(20) 厳しい抑制。
(21) いろつや。
(22) 髪のように真っすぐな。
(23) ブランデンブルク門につながるベルリン一の繁華街。

図1

(24) ドイツ皇帝ウィルヘルム一世の宮殿はウンテル・デン・リンデンに接して建っていたので、その窓から通りを眺めている、とした。
(25) コールタールなどを蒸留して得られ、道路舗装に使う。

織の調査をせよ。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門[1]を隔てゝ緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚[2]まりたれば、始めてこゝに来しものゝ応接に遑なきも宜なり。[3]されど我胸には縦ひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけの紹介状を出だして東来の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。[5]喜ばしきは、わが故里にて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。[6]

さて官事の暇あるごとに、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊に記させつ。[7]

ひと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せも済みて、取調も次第に捗り行けば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写し留めて、つひには幾巻をかなしけむ。大学のかたにては、穉き心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、[8]此か彼かと心迷ひながらも、二三の法家の講筵に列ることにおもひ定めて、謝金を収め、往きて聴きつ。[9]

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時来れば包みても包みがたきは人の好

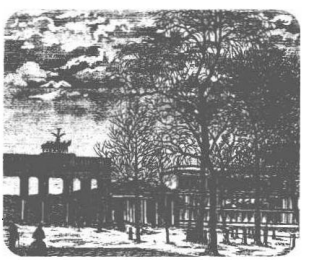
図2

(1) ウンテル・デン・リンデンの西端にある巨大な門。
(2) わずかの間。
(3) 次々に景物に目を奪われて少しのゆとりもないのも当然だ。
(4) 実のない。
(5) 訪問を知らせるための鈴を鳴らすひも。

図3

(6) 東方の日本から勉学のためにやってきたこと。
(7) ベルリン大学。
(8) あるはずもない。

尚なるらむ[10]、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びし時より、官長の善き働き手を得たりと奨ますが喜ばしさにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的[11]、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今の世に雄飛すべき政治家になるにも宜しからず、また善く法典を諳じて獄を断ずる[12]法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私に思ふやう、我母は余を活きたる辞書となさんとし、我官長は余を活きたる法律となさんとやしけん。辞書たらむは猶ほ堪ふべけれど[13]、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題[14]にも、極めて丁寧にいらへ[15]しつる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらんには、紛々たる萬事[16]は破竹の如くなるべし[17]などゝ広言しつ。又大学にては法科の講筵を余所にして、歴史文学に心を寄せ、漸く蔗を嚼む境[18]に入りぬ。

官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懐きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき[20]。危きは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我地位を覆へすに足らざりけんを、日比伯林の留学生の中にて、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ関係ありて、

(9) 講義の席。
(10) 好み。
(11) 受身的。
(12) 裁決を下す。
(13) まだしも堪えることができるが。
(14) こまごました。
(15) 返答。
(16) 乱れもつれた。
(17) 竹の一節に刃物を入れると次々に割れていくように、一気に解決していくこと。
(18) 佳境。蔗は甘蔗（さとうきび）。
(19) もともと。
(20) どうして喜ぶことがあろうか（決して喜ばない）。

彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣[1]するに至りぬ。されどこれとても其故なくてやは[2]。

彼人々は余が倶に麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくなる心と慾を制する力とに帰して、且は嘲り且は嫉みたりけん。されどこは余を知らねばなり。嗚呼、此故よしは[3]、我身だに知らざりしを、怎でか[4]人に知らるべき。わが心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、学の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇気ありて能くしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、唯だ一条にたどりしのみ。余所に心の乱れざりしは、外物を棄てゝ顧みぬ程の勇気ありしにあらず、唯外物に恐れて自らわが手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有為[5]の人物なることを疑はず、又我心の能く耐へんことをも深く信じたりき。嗚呼、彼も一時。舟の横浜を離るゝまでは、天晴豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなか〳〵[6]に我本性なりける。此心は生れながらにやありけん、又早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

彼人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然[9]たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐して客を延く女を見て

(1) いつわってそしり、悪口を言う。
(2) その理由がないわけではない。
(3) わけ。事のおこり。
(4) どうして。
(5) 才能があり、将来に見込みのあること。
(6) 抑えとどめられない。
(7) むしろ。
(8) もっともなことだ。
(9) けばけばしい。

は、往きてこれに就かん勇気なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挾ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふ「レエベマン」[10]を見ては、往きてこれと遊ばん勇気なし。此等の勇気なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らんやうもなし。[11] この交際の疎きがために、彼人々は唯余を嘲り、余を嫉むのみならで、又余を猜疑すること〻なりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を閲し尽す媒[12]なりける。

或る日の夕暮なりしが、余は獣苑[13]を漫歩して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街[14]の僑居[15]に帰らんと、クロステル巷[16]の古寺の前に来ぬ。余は彼の燈火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に[17]干したる敷布、襦袢などまだ取入れぬ人家、頬髭長き猶太教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は窖住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向ひて、凹字の形に引籠みて立てられたる、此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し佇みしこと幾度なるを知らず。

今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつ〻泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧

(10) 亨楽家。
(11) 必要もない。
(12) はかりしれない程の困難を経験しつくす媒介物。
(13) 動物園。ここでは、ブランデンブルク門の西方にある森林公園。
(14) ウンテル・デン・リンデンの東端から北へ約六〇〇メートルの所。
(15) 仮りの住居。
(16) ウンテル・デン・リンデンの東端から東へ約一キロメートルの所。鷗外の「独逸日記」では僧房街と訳されている。
(17) 手すり。

したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ[1]深き歎きに遭ひて、前後を顧みる遑なく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繋累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大胆なるに呆れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、[2]我が真率なる心や色に形はれたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。[3]彼の如く酷くはあらじ。又た我母の如く。」暫し涸れたる涙の泉は又溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが耻なき人とならんを。[4]母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らでは悒はぬに、[5]家に一銭の貯だになし。」

跡は欷歔の声のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、先づ心を鎮め玉へ。声をな人に聞かせ玉ひそ。[7]こゝは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我肩に倚りしが、この時ふと頭を擡げ、又始てわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上ぼりて、四階目に腰を折りて潜るべき程の戸あり。少女は鏽びたる針金の先きを捩ぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中には咳枯れたる老媼の声して、「誰ぞ」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、

(1) 予想していなかった。
(2) じっと見つめたが。
(3) 一二頁の「キクトリア」座の座長。
(4) わたしが恥知らずの人間になってしまうのを。
(5) どうしても葬らなければならないのに。
(6) すすり泣き。
(7) 人にお聞かせなさいますな。「な…そ」は禁止の表現。

戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿[8]の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に会釈して入るを、かれは待ち兼ねし如く、戸を劇しくたて切りつ[9]。

余は暫し茫然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞えしが、又静になりて戸は再び明きぬ。さきの老媼は慇懃におのが無礼の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨[10]にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の竈あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩へる臥床あり。伏したるはなき人なるべし。竈の側なる戸を開きて余を導きつ。この処は所謂「マンサルド[12]」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭の支ふべき処に臥床あり。中央なる机には美しき氈[13]を掛けて、上には書物一二巻と写真帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍に少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳の如き色の顔は燈火に映じて微紅を潮したり。手足の繊く裏なるは、貧家の女に似ず。老媼の室を出でし跡にて、少女は少し訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシャウムベルヒ、君は彼

(8) 獣毛と綿糸とを交織した布。

(9) 閉めきった。

(10) 死んだ。

(11) 台所。

(12) 棟に近い部分はゆるやかにし、軒に近い方で折れて急な傾斜にしたマンサード様式の屋根の下に作った屋根裏部屋。

(13) 獣毛で織った敷物。

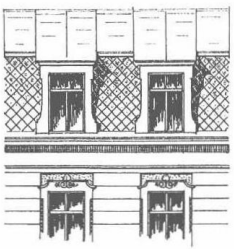

図4

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com